

校長先生のお話に耳を傾けてください。

明日で、あの東日本大震災から6年が過ぎます。今の6年生は、赤木小学校に入学する間際だったと思います。

忘れもしない、2011年、3月11日、午後2時46分、かつて経験したことのない大きな地震が私たちを襲いました。

地震の影響で大きな津波が発生し、海岸線の町や集落が波に飲み込まれ、多くの人々が命を落としました。また、福島第一原子力発電所の放射能が漏れるという事故も起こり、多くの人々が避難を余儀なくされ、今でもふるさとに帰れず、仮設住宅などで暮らしています。

何と不幸な出来事だったでしょう。

亡くなられた方に、心静かに黙祷を捧げたいと思います。黙祷。止め。

ここで、東日本大震災でとても辛い思いをした子どもの作文を紹介したいと思います。

「あの日、私は小学校にいて、みんなと一緒に裏山にいちもくさんに駆け上がりました。

お父さんは、おばあちゃんとお姉ちゃんを乗せて、必死で車を走らせたそうです。それにもかかわらず、大津波がお父さんの車をすっぽり飲み込んでしまったのです。

おばあちゃんとお姉ちゃんは遺骨（死んで骨）となって避難先の仮設住宅に戻ってきました・・・

お墓も流されてしまったので新しいお墓を建てるまでは、おばあちゃんとお姉ちゃんの遺骨が二つ並んで、津波から助かったお父さんと私の生活を見守ってくれています。

私は、うれしいとき、つらいとき、いつも二人に話しかけて過ごしてきました。

幼い頃に、お母さんを亡くした私にとってかけがえのない二人の存在だったのです。

幼いときお母さんを亡くし、また、かけがえのないおばあちゃんとお姉ちゃんまでなくすなんて・・・

可哀想すぎますね。心が本当に痛みます。

現実には、このような、深い悲しみ、重い苦しみを背負っている子どもがいるのです。

私たちは、この子を遠くから応援し見守りながら、共に生き、自分自身、強く生きていかなければならないのです。

私たちの心のふるさと「福島」の未来に貢献できる人に是非ともなってもらいたいと願っています。